

は自轉車の習ひ初めであつた。武藤教授の學究的、黒本教授の古武士的、園教授の古典的は、今に眼底に残る。教授會では篠本教授の諤々は通り物であつた。生徒では漢文の湯淺廉孫、柳井幸弘二氏は一方の雄であり、山崎達之輔氏も下級に入つて來た。

松橋方面に演習があつて諸教授と生徒の家に泊り、不案内の爲め酒を強ひらるゝまゝ飯みすごして閉口したことがある。休日には兒島、落合二教授とよく散策し、一度は耶馬溪に遊んだ。市内では武藏嚴男老人と懇意にした。三十四年の六月となつて、教授時間の都合で漢文教授減員の際、鹿兒島に七高の再興があつて岩崎館長に呼ばれて轉任した。

自分の五高在職は滿二年の短時日であつたが、始めて官立校に就職したのであつたから、自分の精神生活の上に大なる力となつて或る物が與へられた。今は七十一歳の老骨となつたが、下世した多くの僚友の上に思ひを馳せながら此稿を綴る。

## 回顧

高 畠 喜 市

五高在職は、明治四十年四月から同四十三年七月までの間で、校長松浦寅三郎先生の時代に當ります。當時の教官は多く制服制帽を着け、雨の時など足駄履きの人も目に立ちました。これは泥濘の中を涉るには極めて必然的な用意であつたと思ひます。従て新任の少壯教官が、背廣に穿靴は寧ろ異様に感ぜられたことせう。又武夫原や龍田山に颯爽英姿を現はした生徒諸氏の中には、歩兵大尉とか二等軍醫とか、嚴めしき肩書の人もあつて、若輩余にとりては正に兄貴分に當るのですが、日露の戦塵收まつて間もなき頃ですから、尤のことゝ首肯せられます。爾來春風秋雨三十年、熊本の風物、人物、茫洋として輪廓の定かならぬものがありますが、剛毅朴訥だけは正に健在のことゝ信じます。遙に校運の隆昌を祈念して止みませぬ。